

スピノザの目的否定論

— 日常的行為モデルとしての「第一種の認識」 —

柴 田 健 志

はじめに

スピノザの哲学においては生の次元が二つに区別されているように思われる。それらは「実践的な生」の次元と「知的な生」の次元というべきものである。無論、これらはスピノザの用語ではない。スピノザ自身は認識の種類を三つに区別しただけである。しかし、生の次元と認識の種類は対応している。

「実践的な生」の次元とは、人間が外的世界および他の人間と相互作用をおこなう生の次元であり、ひとことでは日常的行为の次元である。「第一種の認識」はこの次元に固有の認識であると考えられる。これに対して、「知的な生」の次元とは真理の認識にのみかわるような生の次元である。「第二種の認識」および「第三種の認識」はこの次元に固有の認識であると考えられるのである。

この論文で取扱われるのは「実践的な生」の次元である。よく知られているように、スピノザは人間の行為の理論的な説明から「目的」を除いた。「目的」に言及することなしに人間の行為を理論的に説明できると考えていたからである。では、スピノザが目的論モデルのかわりに

採用した行為モデルはどのようなものであったのであろうか。この問いかけをもとにして『エチカ』を読み直してみると、その解は意外なところに見出された。「第一種の認識」がまさしくスピノザの行為モデルだったのである。

以下に提示したのは、この解にたどりつくまでの私の論考の道筋を問題解決の手順という形にまとめ直したものである。

1 行為の目的 問題点の整理

日常的行為をモデル化するにはいくつかのアイテムがある。なかでも、「意図」および「目的」は必須のアイテムであろう。というのも、これらがなければ行為というものが成立しなないと考えられるからである。実際、行為とはその主体がまさしくその行為をおこなうことを「意図」することなしには開始されえないであろう。しかし、「意図」だけでは行為を説明することはできないということも確かである。いったい何のためにその行為をおこなうのかという「目的」がなければ、そもそもその行為を「意図」することができないと考えられるからである。この意味において、「目的」は「意図」に先行していなければならないであろう。以上のような論理は、すでにスコラ哲学の伝統において洗練されたものである。スコラ哲学の議論においては、「目的」を行為の原因とみなしうるかどうかという点が重要な論点を形成していた。ひとことでは「目的原因」というものを認めるかどうかという論点である⁽¹⁾。この論点に関するスピノザの立場は「目的原因」を完全に否定する立場

であるということが出来る。

しかしながら、ただたんに「目的原因」を否定するだけでは、日常的行爲モデルを構成することはできないであろう。なぜなら、「目的」とは行爲がおこなわれるための不可欠の条件であると考えられるからである。実際、何の「目的」も考えずに、ただ行爲を「意図」することなどできない。どんな場合でも、何のためにそれをするのかということを考えて、その「目的」を達成するような行爲が「意図」されているはずなのである。

スピノザはこの点をもちろん承知していた。スピノザはただたんに「目的原因」を否定したのではない。それを別の原因によって置換えたのである。スピノザによれば、行爲の真の原因は「衝動」にほかならない。この点は『エチカ』第4部定義7に明示されている。

「それによってわれわれが何ごとかをなすところの目的を、私は衝動 (appetitus) と解す。」(4/7/D)。

行爲を「意志」ないし「意図」するにはそれに先立つ「目的」の認識が必要であると人間は考えるが、じつは目的など存在しない。スピノザによれば、人間が「目的」と考えているものはじつは「衝動」だからである。しかし、スピノザの主張には分かりにくい点がある。たしかに、われわれは行爲をおこなう際に何らかの「衝動」を感じている。ところが、この点を認めたとしても、「目的」とはじつは「衝動」なのだという説明には疑問が残るであろう。「衝動」と「目的」は明らかに別のものであると考えられるからである。実際、「衝動」は何らかの「目的」へと

向かう「衝動」であろう。それゆえ、スピノザの主張を理解するにはこの点をさらに問わねばならない。すなわち、いかなる意味で「目的」とは「衝動」そのものであるといえることができるのか。言い換えれば、いかなる意味で「目的」を「衝動」に還元することができるのか。これが問題である²⁾。

2 衝動の原因 問題点の焦点化

上記の問題を解決する手がかりは、「衝動」に関するスピノザの理論そのもののなかにあるように思われる。スピノザによれば、人間は自身自身の「衝動」の深い原因を知らない。だからこそ自分の行爲を目の前にある「目的」によって説明することしかできないのである。ということは、「衝動」の原因を説明すること(スピノザはまさにそれを試みている)が、行爲の説明から「目的」を取り除くことにつながるであろう。この観点から、「衝動」の原因にかんするスピノザの論理を考察しなければならぬ。

スピノザのいう「衝動」とはそもそも何のことかという点から考えてみなければならない。そこで、スピノザの用語法からこの点にアプローチしてみよう。スピノザによれば、現実存在する個物(以下、人間とする)は「神の本質を表現」(1/36/Dem)している。神の本質とは「現実存在し活動する能力」(1/34/Dem)である。神の活動には何の目的もなく、したがって神の活動によって生み出される諸事物は、ただ必然的に生み出されていると考えられる。人間において「表現」される神の

活動は「コナトゥス」(3/6D)と呼ばれる。「コナトゥス」とは、それ自身の存在の外に何の目的も持たず、ただ自己の現実の存在を維持しようとするはたらしにほかならない。スピノザは、それこそが人間の「現実的本質」(3/7D)であると考えていた。

さて、考察のキーワードである「衝動」とは「コナトゥス」という一般的な用語が具体的に言い換えられたものにほかならない。「衝動」とは心身の「コナトゥス」なのである(3/9S)。人間が感じる「衝動」には、もともと何の目的も含まれていないという点をここで確認しておくことができる。

ところで、人間は自己の「衝動」を意識しているが、スピノザは「衝動」そのもの意識された「衝動」を区別して、後者を「欲望(cupiditas)」(3/9S)と呼ぶ。用語法が少々煩雑に感じられる。というものの、スピノザはこれらをそれほど厳密に区別して使用しているように見えないからである。しかし、ということは、スピノザが「欲望」について述べることをすべて「衝動」に関することとみなして差し支えないということである。この点を了解しておくことは解釈の上で意外と便利である。

問題は「衝動」の原因は何かということであった。じつは、「欲望」に関する定義のなかにこの点が明記されている。以下の解釈のポイントとなる内容なのでまるごと引用しよう。

「欲望とは、人間の本質が何らかの変容によって何ごとかをなすように決定されていると概念されるかぎりにおいて、人間の本質そのものである」(3/1/AD)。

「欲望」ないし「衝動」とは人間の「現実的本質」であった。「現実的」というのは現実に行使されているという意味である。言い換えれば、「何ごとかをなすように決定されている」という意味である。ただ、人間の「本質」が「何ごとかをなすように決定」されるためにはひとつの条件がある。定義によれば、その条件とは「変容」である。すると、人間が現実的に「衝動」を感じているということは、すでにその「本質」が「変容」によって決定された帰結にすぎないということになる。「変容」こそが「衝動」の原因である。したがって、人間は自己の「衝動」の原因を知らないというスピノザの主張を次のように言い直すことができる。すなわち、人間は「変容」がどんなふうに生じているかを知らない、と。では、「変容」とは何であろうか。問題の焦点はここにある。

スピノザは「変容」を「身体の変容」として考えた。人間身体が外部の対象から作用を受けることによって生じる状態が「変容(affectio)」(2/13Dem)と呼ばれる。また、人間は自己の身体に生じた「変容」を知覚していると考えられる。それが「身体の変容の観念」(2/13Dem)である。「身体の変容」およびその「観念」が「衝動」をもたらす。この論理のポイントは、「身体の変容」およびその「観念」がすでに結果にすぎず、「変容」がもたらされる複雑な過程そのものを人間はまったく知ることができないという点にある。

スピノザは、『エチカ』第二部で「身体の変容」およびその「観念」の機能を理論的に説明している。その理論全体が「第一種の認識」と呼ばれる認識の理論を構成しているのである。したがって、「目的」とはじつは「衝動」以外の何ものでもないというスピノザの主張を明瞭に理解するには、「第一種の認識」を考察する必要がある。

問題となっているのは、スピノザの主張に反して、やはり何らかの「目的」が「衝動」とは別に存在しているように見えるという点である。「第一種の認識」を考察することによって明らかにしなければならないのは、いったん「目的」と見えるものがいったい何であるのか、という点である。私の解釈によれば、いったん「目的」と見えるもの、すなわち未来に設定されているように見えるものは、じつは過去の再現表象にすぎず、しかもその再現表象は「衝動」の一部をなしている。過去の経験にもとづく行動パターンの反復が、未来に設定された「目的」の追求のように思いこまれているのである。

『エチカ』のテキストのなかにこのようなアイデアが明瞭に存在しているという点を以下で示さなければならない。

3 身体の変容 問題点の解法

スピノザが「身体の変容」について論じたテキストは『エチカ』第二部定理17および定理18である。これらの定理は「第一種の認識」の基本的な構造を示すものであり、その意味で重要な定理である。ただし、さしあたり注目すべき点は以下のような点である。これらの定理では、かつて身体に生じた「変容」が再活性化される過程を説明することが焦点になっている。「身体の変容」が再活性化されるということは、それと同時に「身体の変容」の「観念」が再生されるということの意味する。これらが「衝動」をもたらすものであるとすれば、人間は過去の再現表象によって行為に決定されていることになる。私の解釈の要点はここに

ある。この観点から定理17および定理18を検討してみよう。まず定理17である。

「人間身体が外部の物体の本性を含むような仕方では刺激されると、この物体の現実存在あるいは現前を排除するような刺激を受けるまでは、人間精神はこの物体を現実存在するものとして、あるいは自己に現前するものとして思い浮かべるであろう」(2/17P)。

人間身体は外部の物体から刺激されることによって「変容」する。そのとき人間身体がどんなふうに「変容」するかは、刺激によって異なるであろう。この点が「外部の物体の本性を含むような仕方では刺激される」と表現されている。「変容」には現実存在する「外部の物体の本性」が含まれている以上、「変容」の「観念」にもそれが含まれていると考えられる。つまり、人間精神が認識するのは外部の物体そのものではなく「外部の物体の本性」を含む自己の身体の「変容」にすぎない。しかし、ということとは、「変容」さえ保存されていれば、人間精神は外部の物体を現実存在するものとして認識し続けるということになる。定理17の系はまさしくここに焦点を定める。

「人間身体をかつて刺激した外部の物体が現実存在していなくても、あるいは現前していなくても、人間精神はそれをあたかも現前するかのよう思い浮かべるであろう」(2/17C)。

では、こういうことがいっただうやっていると考えられているの

であろうか。この系の証明がそのメカニズムの説明になっている。証明によれば、外部からの刺激は身体の「流動的な部分」を動かして身体の「軟らかい部分」を変形させるが、変形した部分に対して後でもういちど「流動的な部分」が当たると、「流動的な部分」は外部からの刺激によって動かされたときと同じ運動をすることになるであろう。こうして、その刺激を与えた物体が現前する場合と同じ条件が身体内部に再生されるのである。

次の定理18はこの定理を受け、そのメカニズムを敷衍している。

「人間身体がかつて二つあるいは多数の物体によって同時に刺激されたとしたら、精神は後でそのなかのどれかひとつを表象するときただちに他のものを想起するであろう」(2/18P)。

定理17の証明では、「軟らかい部分」の「変形」すなわち外部からの刺激によって生じた「変容」が保存されうるといふ点が前提されていた。定理18の証明はこの点を踏まえ、それを「痕跡 (vestigis)」(2/18/Den)という言葉で要約する⁽³⁾。二つの物体の刺激によって残された「痕跡」が、そのうちひとつのものを表象させるような運動によって再活性化されると、それに連動して他のものを想起させるはずである。スピノザは言葉と事物の例をあげている。言葉を聞くとそれが指示する事物が想起されるからである。ただし、何が想起されるかはもともとの刺激の与えられ方によって異なるであろう。定理18の注解によれば、あるものをきっかけにして他のものが再生されるのが「記憶(memoria)」(2/18/S)であるが、それは「人間身体の変容の秩序および連結にしたがって

生じる」(2/18S)。つまり、「記憶」とは事物の客観的な「秩序および連結」を表現するものではなく、あくまでも主観的な連想であるというのである。

まとめておこう。現実に存在する複数の物体によって身体に生じた「変容」は「痕跡」として登録されていることが議論の前提である。これは説明のための仮説であるとみなしてよい。その痕跡が、現在の刺激をきっかけに再活性化されると、現前していないものまで再生され表象されることになる。このように、これらの定理で問題になっているのは過去が再現されるメカニズムなのである。

ところで、現在の刺激はどうして過去の「変容」の「痕跡」を再活性化させるのであろうか。定理18の証明でこの点は触れられていないが、重要な点であるように思われる。というのも、過去に身体の「変容」をもたらした刺激と、現在与えられている刺激は別の刺激だからである。数的に異なった刺激がどうして同一の「痕跡」を再活性化させるるのであろうか。

この問いかけに対するスピノザの答えは、『エチカ』第二部定理40注解2で与えられている。スピノザの答えをひとことではいえば、類似である。過去の刺激と厳密に同一の刺激など存在しない。しかし、「痕跡」を再活性化させるには厳密に同一である必要はない。過去の刺激に類似した刺激であれば「痕跡」は再活性化されうる。したがってまた、「痕跡」の再活性化によって再生された表象も、もともと経験された事物の表象と同一ではありえない。それに類似しているだけである。ということは、ここで考察されているのは「一般概念」の発生であることになる。

実際、スピノザは『エチカ』第二部定理40注解1において、「一般

概念」は外部からの刺激がくり返されることによって形成されると述べている。この主張が定理18を受けていることは明白である。さらに『エチカ』第二部定理40注解2では、「一般概念」による認識が「第一種の認識」として認められ、その形成過程が二種類に区分されている。

(1) 感覚をとおして与えられる多数の個物による

(2) 想起によって類似の観念が形成されることによる

このうち(2)では定理18注解の参照が求められている。「痕跡」の再活性化は「一般概念」を作り出すメカニズムとして認められているのである。

こうして、スピノザのいう「第一種の認識」とは過去の経験を一般化した形で再生するような認識であることが明らかになる。そこで、はじめに述べたように、「第一種の認識」を日常的行為モデルとして解釈することが正しければ、人間の行為は未来に設定された「目的」によってではなく、むしろ過去の経験にもとづく表象によって決定されているという考えを『エチカ』のなかに発見することができるはずである⁽⁴⁾。

4 第一種の認識 問題点の解決

スピノザによれば、行為の原因は人間の「衝動」であり、かつそれ以外のものではない。この主張から「目的」の概念を完全に払拭するには、以上で考察した「一般概念」の理論を行為の理論としてとらえる必要がある。そのために、ここで新しい論点をつけ加えよう。

スピノザの説明によると、人間に何かをおこなわせているのは「衝動」

だが、「衝動」そのものは「変容」によってもたらされる。したがって、人間の行為のメカニズムを説明するには「変容」にまでさかのぼって考えなければならない。ところが、「変容」とはただたんに外的刺激によって生じた現在の状態のみを指すのではない。むしろ、現在の刺激を契機にして過去の「変容」が再活性化され、そこには存在しないものが表象される。また、そのくり返しによって「一般概念」が形成されると考えられるのである。以上はすでに考察したことの要約である。

新しい論点とは、「身体の変容」の「観念」が「喜び」ないし「悲しみ」として感じられるという点である。この点に関するスピノザの説明はじつに簡潔である。「身体の変容」は外的刺激によって生じる。ところで外的刺激は人間身体が「活動する能力」を「増大」させるか、反対に「減少」させるか、あるいはまた「増大」も「減少」もさせないかである(32/Po4)。最後の場合を便宜上考察の外に置いて考えると、身体の「活動する能力」が「増大」するとき、その「観念」は「喜び」として感じられ、また逆の場合は「悲しみ」として感じられることになる(31/15)。

では、これまでの考察にこの論点をつけ加えることによって、いったい何が明らかになるのだろうか。第一に、人間を行為に決定する「衝動」には二種類あるという点である。「喜び」からなされる行為と、「悲しみ」からなされる行為がある。第二に、人間の感じる「喜び」および「悲しみ」とは「身体の変容の観念」であり、すでにみたようにそれは「外部の物体の本性を含む」がゆえに、「喜び」という感情には「喜び」をもたらすものの表象が、また「悲しみ」には「悲しみ」をもたらすものの「表象」が含まれているということである。

以上2点をまとめると、次のように考えることができるであろう。人

間は自分に「喜び」をもたらしてくれるものを表象しようとし、またそれを実現しようとするであろう。また逆に自分に「悲しみ」をもたらすものを避け、それが実現されないようにするであろう。こうして人間の行為の基本的なメカニズムが図式化される。

参照すべきテキストは『エチカ』第三部定理12および定理13、定理28である。これらのテキストで上記の解釈を確認していこう。

定理12および定理13では、精神のコナトゥスが問題になっている。まず定理12を検討しよう。身体の活動能力を増大させるような「変容」が生じたすると、精神にはその「変容」について「観念」が生じる。この「観念」を持つているということは「喜び」を感じているということである。身体はこの「変容」を維持しようとするが、そこには外部の物体の本性が含まれているから、精神はその物体を「できるだけ表象しよう」とつとめる(3/12p)はずである。これら心身のコナトゥスこそ「衝動」にほかならない。

この論理が過去の「痕跡」の再活性化された場合にもあてはまるという点に注意すべきである。過去に「喜び」をもたらした「痕跡」が現在の刺激によって活性化すれば、そのような「変容」をもたらすと思われる事物の一般的な表象が発生すると考えられるが、精神はそれを「できるだけ表象しよう」とつとめる」はずである。

スピノザによれば、「衝動」ないし「欲望」とは「何かをなすように決定」されたかぎりでの「活動能力」にはかならないから、このような表象を含む「衝動」はそのまま行為へと展開するであろう。定理12を受け、定理28がこの点を明言する。すなわち「われわれは、喜びに導くとわれわれが表象するすべてのものが実現するようつとめる」(3/28/

p)。ここで「実現」されようとしているものとは、「一般概念」として表象された対象にほかならない。いうまでもなくこれが行為の「目的」と考えられているものである。

以上、定理12について述べたことを、「活動能力」が減少する「悲しみ」という「変容」にあてはめたのが定理13である。身体は活動能力を減少させるような「変容」が生じたすると、身体はこの「変容」を何とかして取り除こうとするから、精神はその「変容」をもたらした物体の存在を排除するようなものを表象しようとするであろう。その場合、精神はそのようなものを「想起」(3/13p)するしかない。無論それは「一般概念」である。ようするに、「悲しみ」をもたらす「変容」を取り除くと思われるものならどんなものでもいいわけである。したがってそれを「実現」することは「悲しみ」をもたらすものをただだんに取り除くこととほとんど区別されない。それで定理28も「悲しみに導くとわれわれが表象するものを遠ざけあるいは破壊するようつとめる」(3/28/p)となっている。

まとめよう。行為するとき、人間はまだ存在しないものを思い浮かべ、それを実現しようとする。それが「目的」という言葉で指示されているものである。しかし、以上の考察からすれば、「目的」とは何ら未来に設定されたものではない。「目的」が指示する表象は経験的にもたらされた「一般概念」にすぎないのである。

ところで、「一般概念」は人間精神に現前する限りでしか存在しない。つまり現在にしか存在しない。それが未来に存在するよう見えるのは、行為を遂行する際の人間の意識が未来に向いているからである。『エチカ』第二部定理17で証明されているように、「身体の変容の観念」は

ものを現前するものとして表象するのであり、したがってそれが「過去あるいは未来の時間の表象と結合するかぎりにおいてでなければ、人間はそれを過去あるいは未来として表象しない」(318/Dem)のである。

このように、人間の行為の原因としての「衝動」を「変容」にまでさかのぼって分析してみると、結局は「一般概念」の表象が行為をもたらしていることになる。ところが、「一般概念」による認識は「第一種の認識」であった。この意味において、「第一種の認識」を行為モデルとしてとらえることができるのである。

おわりに

以上から結論しうることは、人間の行為はまだ存在しないものを「目的」として設定してなされるものではないというのがスピノザの主張であるという点である。この点の含意を考察して論文を締めくくることにしよう。

人間の日常的行為はこれまで存在しなかったものの実現に向けられているのではないとすれば、それは過去の行動の再現にすぎないことになる。過去の行為を厳密に再現するのではなく、「一般概念」の表象をとおしてのパターンの再現という形になる。このことは、日常的な行為に何ら創造性を認めないということを含意していると考えられる⁽⁵⁾。

では、スピノザは人間の存在に何らの創造性をも認めなかったと結論してよいであろうか。無論、そのように結論することはできない。なぜ、できないのであろうか。論文の冒頭に述べた生の次元の区別が意味を持

つのはこの点においてである。「第一種の認識」は「実践的な生」の次元に結びついている。それは人間が生きるための次元である。生きたためには「一般概念」を媒介して環境の変化に対応することが有効であつて、人間身体(神経系)がそのようにデザインされているという点にスピノザは気づいていたように思われる。それゆえ、生のこの次元で人間に創造性を求めても無意味である。むしろ創造性は「第二種の認識」および「第三種の認識」が関係する「知的な生」の次元で要求すべきことなのである。「知的な生」の次元とは真理の認識にかかわる次元である。つまり、真理の認識においてのみスピノザは人間の創造性を見出そうとしたのである。じつはこの点を私はすでに別の論文で論じた⁽⁶⁾。今回はその逆に、「実践的な生」の次元に注目し、それが創造性とは無関係なたんなる生の維持という視点で理解されているということを示したのである。

凡例

『エチカ』の参照箇所は以下の略号を用いて本文中に挿入する。
定義→D 要請→Post 感情の定義→AD 定理→P 証明→Dem
系→C 注解→S

【例】『エチカ』第一部定理2→I/25/P

使用テキスト Gebhardt (ed.) 1972, *Spinoza Opera II*, Heidelberg

注

(1) Pasnau 2001を参照。この研究では、アヴィセンナ、トマス、スコトゥス、オッカム、ビュリダン等による「目的原因」をめぐる議論が整理されて

いる。

- (2) 「目的」は行為によって実現されるものである。したがって行為が開始される時点では「目的」はまだ存在していない。すると、「目的」を行為の原因とみなすことは、存在していないものが存在するものに對して因果的な効力を持つという主張を認めることになる。これがスコラ哲学においてすでに問題化した論点である。トマスは「目的」それ自体ではなく「目的」についての思惟が行為に先立つとすることによって問題の解決を図った (Pasnau 2001: 302-303)。時代を隔て、ウィリアム・ジェイムズは「観念—運動 (ideo-motor)」説においてトマスとまったく同じ主張をくり返すことになる。「観念—運動」説とは、「目的」それ自体ではなく「目的の観念」(James 1981: 1128) が行為を開始させるという主張だからである。さらに、現代の神経科学においては、「観念—運動」説を、対立する「感覚—運動 (sensori-motor)」説と相補的に用いることによる解決も試みられている (Prinz 2008)。しかし、スピノザが主張しているように「目的」を「衝動」に還元することができれば、この問題点それ自体が解消するであろう。

- (3) 定理18で証明されているのは「記憶」のメカニズムである。外部からの刺激が「痕跡」として保存されるという点を仮定することが「記憶」の理論的説明を可能にしている。「痕跡」の仮定によって「記憶」のメカニズムを説明するという論理は、哲学史的にはすでにプラトン『テアイテトス』(191D) およびアリストテレス『記憶と想起について』(450a30) によって採用されている。また、19世紀に成立する実証心理学、その後現れるゲシュタルト心理学においても引き続き採用されているものである。この間、「記憶」の理論的説明における基本的な論理構造は変化していない。19世紀の実証心理学についてはエビングハウス (Ebbinghaus 1913: 62-63) を参照。ゲシュタルト心理学についてはギエーム (Guillaume 1934: 147-148) を参照。いずれも「痕跡 (trace)」という概念にもとづいて「記憶」のメカニズムに関する理論的説明が与え

られている。スピノザによる「記憶」の理論的説明も同様の論理構造を持つている。しかし、以下で考察するように、スピノザは「一般概念」を発生させる機構として「記憶」に着目しているのである。

- (4) この解釈が正しければ、スピノザの「第一種の認識」に最も近い行為の理論はブルデューの「ハビトゥス」の理論であると考えられる。なぜなら「ハビトゥス」とは過去の経験によって身体化された行為の一般規則だからである (Bourdieu 1980: 87-92)。実際、ブルデューも行為の理論的説明としての「目的論」を否定している (Bourdieu 1980: 103-104)。人間の行為を生み出すのは未来ではなく、現在においてはたらく過去である。

- (5) この結論も「ハビトゥス」の理論に一致する。「ハビトゥス」は過去の経験があてはまる範囲で行為者に一定の自由を許容するものだが、この自由は「予見不可能な新しい創造というにはほど遠い」(Bourdieu 1980: 92)。

- (6) 柴田 2014

文献

- ・ Bourdieu, Pierre 1980, *Le Sens Pratique*, Minuit
- ・ Ebbinghaus, Hermann 1913, *Memory: A Contribution to Experimental Psychology*, trans. by Ruger & Busseusius, Columbia University
- ・ Guillaume, Paul 1937, *La Psychologie de la Forme*, Flammarion
- ・ James, William 1981, *The Principles of Psychology volume II*, Harvard UP
- ・ Pasnau, Robert 2001, "Intentionality and Final Causes," Dominik Parler (ed.), *Ancient and Medieval Theories of Intentionality*, Brill, pp.301-323

- ・ Prinz, Wolfgang 2008, "Experimental Approach to Action," Roesler & Elian (eds.), *Agency and Self-Awareness*, Oxford, pp. 165-187
- ・ 柴田健志 2014 「真理と創造性：スピノザの哲学における「直観知」の問題」 鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』79号 pp.1-